

## 刻限さしづ (抄) 〓 掃除し遂げる 〓

道の原典研究会11月例会資料

明治二十一年三月二十九日 (陰曆二月十七日)

一同へ御話 (梅谷四郎兵衛家の御願を致せし処)

さあ〓いかなる一つの事情、掃除一条、掃除一条すつきり掃除して了うで。皆片付ける道具も要る。どうでも掃除をして掃き立てる。隅から隅まで、掃除一つ道を改め。掃除の道具も要る、又片付ける道具も要る、治まる道具も要る、拭き掃除する道具も要る。いつも掃除や、あちらもこちらも掃除や。隅々までも掃除や。どういう処、心の掃除や。さあ〓後の道を改め。長いではない。今まで聞いても居るであろう。分からん一寸拭き取る。分からんこれからや心次第。今までの道いかなる聞き分け。又々の理一時見える。どちらへ見えるやら、箒何処へ靡くやら。誠一つ理を聞き分けねばならん。又安心の道もある、又細い道もある。さあ〓又見え来るで。先々映してある。よう聞き分け。真実誠は道の道。しつかり定め、心を治め、しつかり治め。これよう一つの心定め、心いつまでしつかりと踏ん張れ。実を定める一つの理、道の道を通す。しつかりと心を定め第一やで。

明治二十四年五月十八日 午後十一時

刻限御話

・・・・一日の日や〓と一寸話し掛けたる。一日の日というは大きい話、前々より論したる。どんな道があつてもおめ恐れるやないで。これまでも論してある。内々胸の思やんが第一。どうでもこうでも連れて通らにやならん。踏ん張らにやならんという理で刻限今一時の処、も〓身が迫る。身が迫るやない、世界が迫るから皆寄せる。一点の理を見せる。いかなる道も見えて来る。うっかりはしては居られん、そこで身に障り。あちらの事情が走り身上が迫る。身上迫るやない、世界の道が迫る。どんな道が見えても案じる事は無い。恐れるも心、案じるも心、勇むも心、皆々の心を寄せてよく聞いて置かねばならん。包み〓て胸の内、遠くいかなるも心一つの道、心一つの理をめん〓一時という。どんな事がありても、辺所ではどんな難儀が起こるやら知れん。皆承知をして居れば、その日が来てもほんにあの事情かと、心に楽しむ。いつぱしどういふ事情になるとも、日本一つの道がある。こうがある。神一条と言うてある。分からんやあろうまい。案じる事は要らん。天より始めた一つの道を治めるといふ。

明治二十六年五月十一日 午後十一時五十分

刻限

だん〓道を早く取り替え、だん〓論し通り、伺い通り、どんな事でもこんな事でも危なきは無いと知らしたる。なれど伺いさしづ、論の理を消して、めん〓心の理を拵えて、暗がりの道。

明治二十八年三月十八日 午後八時

刻限（本席島ヶ原より御帰りの晩平野檜蔵目の障り願の前）

さあ／＼変わる／＼／＼、多くの中、世界の中、信者信者と云うて日々連れて帰る。改める心の磨き。濁り言葉は無けれど、心に濁りありてはどうもならん。通るに通れん。あちらへ出越す、こちらへ出越す中に、真実信者に聞こえたら、どうするぞ。俺が／＼と云うたて、澄まさにやならん。皆んな中に上から澄ませ。空から澄ませば、皆晴れる。上から濁れば、はた曇り真つ暗がり。

明治二十八年十月七日 夜十時

刻限御話

皆んな出て来る。満足を与える。満足の理が世界。今まで結構は分かりてあれども、この理が分からん。多分の人が入り込む／＼。これから何んぼう入り込むやら知れん。何処から出て来るやら分からん。世上にては掃除をし掛けた。何つからどういう者出て来るやら分からん。いつとも分からん。分からん先から論す。あつてから論すやない。さしづ通り皆成りて来る。あら／＼は今まで分かりてある。応法のようなもの。これから日々日が経てばどういふ事も運ばにやならん。難しい事を一寸話し掛ける。どういふ事話し掛ける。何程身の障り幾重幾重何ぼうさしづしたとてさしづはその場限り。どうしたらよいこうしたらよいといえど皆そのまゝ。さしづ無くても勝手だけはよう出来る。さしづ通り出来ん。さしづ通り出来たる事もある。出けても不承々々だらけ。あちら腹立てこちら腹立て一つの理に治まらん。互い／＼の心さえ皆んな話し合うなら一時の理に治まる。この道は俺が／＼と云うたて皆んな神の道、神が働けばこそ日々の道である。（中略）

世界には新しい道が千筋も出来て来た。どんなよふぼく出来るやら分からん。あちらの国からよふぼく、こちらの国からもよふぼく、高い山にも山の背腹にも谷底にもある、低い所から引き出すには引き出し難い。高い所から引き出せば早い／＼。高い所のよふぼくはする／＼と下りて来る。どんなよふぼく寄せてどんな仕事するやら分からん。小さい心はやめてくれ。疑ぐり／＼の心はやめてくれ。ほしい、をしい、うらみ、そねみの心はやめてくれ。そこで席一つの理をよく聞き分けてくれ。

明治二十九年三月三十一日 夜九時

刻限

さあ／＼水が出る／＼／＼。ごもく引つ掛かつて錆水もあれば悪水もある。すつきり出すで／＼。抜ける処はすつきり聞いて置け／＼。さあ／＼書き取れ／＼。悪水も出る、錆水も出る、泥水も出る。どんな道に付けるやら分からん。一時以て洗い切つたら、一時に救かる程に。（中略）

明日日分からん。よう聞き分け。一時も早くあちらの穴も破り、こちらの穴も小突き廻し、水をどろ／＼流るゝならば、錆も一時に除れる。一時除れたなら、いかな勇みも付くやろ。ほんに成程やと、道中道筋は付いて来たのやろ。七八年このかたの事情見たなれば、疑いはあろうまい。

さあ／＼行こう／＼。早く救げにやならん／＼。急ぐ／＼。席の身の内、これは急ぐ／＼。談示や／＼、改革や／＼と夜の目も寝ずに、あちらも談示、こちらも談示、やはり元の清水、水の穴がとんと分からんから、すつきり井手を流して了うで。

明治三十二年十一月二日 午前四時頃  
刻限

刻限は詰まり／＼てどうもならんから、それ／＼決まりた理を知らず。何の事でも違うという事は一つも無い。なれど、これまでというものは、刻限の理を聞きながら、どうもならん。何を聞いて居たのやら分からんようなもの。どうでも刻限は間違わん。刻限は積もり積もらにや話出けん。時々論した処が分からん。そこで、何ぼ言うたて分からん。刻限は積もり／＼ての刻限である。善き事は何ぼ遅れてもよいがなれど、成らん適わん声も無く、堪えるに堪えられん事察してみよ。誰の事とは言わん。紋型無き処からの道理を見れば、嘘はあろまい、間違いはあろまい。

暫くして  
さあ／＼もう一言／＼押し置いて置こう。さあ／＼もうこれ、どうでもこうでも、掃除という。刻限出した限りには、仕遂げにやならん。掃除仕遂げる。隅から隅まで掃除に掛かる、掃除に掛かりたら、あちらこちら声が聞く／＼。どんな事を聞いても、心を授けた限り、一名一人の心という。おめも恐れも無い。控え心は受け取る事出けん、と論し置こう。

明治四十年六月四日（陰曆四月二十四日）

午後十一時本席御身上御障りに付、教長初め宿直本部員一同出席の上、十二時刻限の御論

言うた話一つと言うたら一つ、二つと言うたら二つ、三つと言うたら三つ、一つ理これ一寸も違わぬよう順序計るなら日々頼もしい。八方拡がる。どんなものも豊か豊か、日々思うて居たなあ／＼、何処でどう言うとも無くして皆言うようになる。そうしたら一列にどういう事出来て来るとも分からん。これを見えん先から言うて置く。これまで見えぬ先から言うて置いた事見えて来たるやろう。これ話の止めにして置く。前々くどう／＼言うて置いたる。八方から心一つに寄せるは、第一天の理である。これ頼むから話した事治め、よう聞いて置いてくれよ。しっかりと言い付けてくれよ。ウゝゝゝ。